

2024  
**3・4** 月号  
no.612

『京都の福祉』は福祉関係者に福祉の課題や情報を提供する「京都府社会福祉協議会」(府社協)が発行する広報誌です

# 支える人を支える 京都の福祉

文化ホ



● “こどもまんなか社会”の実現を目指して▼4ページ

● 将来の地域社会の担い手である子どもたちに、

福祉の世界の魅力を知ってもらおう

▼6ページ

もえくさ



T.K

本誌「京都の福祉」は、本会の各部署から職員が集まり、広報推進チームを組織して作成している。広報推進チームは、本年度から広報誌「京都の福祉」に加え、HP、SNS、イベントでの広報も所管する大規模な部署横断チームとなった。

令和5年度を振り返ると、連載企画「コロナ明けの時代をどう創るか」では、若手3人が中心となり、企画、取材、執筆を手掛けた。4回にわたる連載の位置づけ、取材先の選定、紙面構成など、悩みながらも何度も話し合い着実に歩みを進めることで内容の濃い記事を生み出すことができた。

また、イベント「京都府民フェスタ」の出演では、新規採用職員がリーダーとなり企画、準備、当日の運営に奮闘した。多くの先輩職員を巻き込んで協力を得る中で、当日は千名を超える方々にブースにお越しいただき大盛況となった。

広報推進チームは、経験年数や部署が異なる職員が協働する場であり、その相互作用によって職員が持つ力を伸ばせる場になっている。令和6年度も人が育つ環境を提供できるチーム運営を行ってきたい。

# ともに生きる豊かな地域社会の実現に向けて

## 社会福祉協議会と社会福祉法人の連携・協働の推進方策について

### 2024年以降の社会に向かつて

### ー人口減少社会、コロナ禍で見えてきたものー

新型コロナウイルス感染症は、世界中に大きな混乱と甚大な被害を招きました。日本でも緊急時の医療・福祉の体制の課題、地域社会の脆弱性、生活困窮者等の課題が一度に顕在化しました。そうした中でも、医療・福祉関係者や電気、水道、交通等の社会インフラに関わる方々は、必死で日常生活を支えておられました。その奮闘に心から敬意を表したいと思います。

社会活動のすべてがコロナ前に戻る

人が生きていくためには、地域の環境の中で関わり合い、支え合いが必要です。一人勝ちではなく、お互いさまの社会をつくらなければなりません。しかし、都市では人・物・情報の流動性が著しく多様で、新たな課題が日々発生する状況があり、中山間地では人口減少等により日常生活の維持そのものが課題となるなど、生活課題は複雑、多様化しています。その中で、私たちは法律や制度がないからできない



わけではありません。生活様式や働き方は大きく変化しています。一方で、対面での交流の価値や「絆」「支え合い」の重要性が再認識されました。こ



というわけにはいきません。先人たちは、制度のない時代からその課題に向き合ってきました。今こそ、その熱い思いや知恵を引き継いでいかなければならないと思います。

### 生活全体を支える 視点をもった 生活困窮者自立支援制度

私が、厚生労働省において生活困窮者自立支援制度の創設に携わった中で大切にしたのは、現場の工夫が困った人を支えてきたという実践を活かせる仕組みにすることです。

生活困窮者自立支援制度は、困窮と地域での孤立を解決するための多様な福祉実践から見いだされる「地域福祉の再発見」であったと思います。2013年以降の社会福祉制度の変化を概観すると、制度、政策の方からまずまず地域福祉に関わっていることが見てとれます。その中で大事なことは、制度と地域福祉実践を融合して、それぞれの地域に合うものをつくっていくということ。

重層的支援体制整備事業においても、地域福祉で培った活動や取り組みが前提としてあって、それらを踏まえて制度が包括化され、いわば化学反応を起こしながら事業を展開していくことが大切です。

京都府社会福祉協議会、京都市町村社会福祉協議会連合会、京都府社会福祉法人経営者協議会は、全国社会福祉協議会副会長の古都賢一氏を講師にお招きし、管理者セミナーを1月23日に開催しました。

れらは、人の本質であり、今、日本の力が試されているといえます。

このような中で、1月1日に能登半島地震が起こりました。被災地は、高齢化が進む地域で、農業、漁業で暮らし、厳しい環境でも今まで支え合って生きてこられた方が多く、地域と切り離される不安も大きいと想像されます。この震災は、私たちに重い課題を投げかけています。これまでの経験や社会福祉協議会・社会福祉法人のネットワークを生かして被災地支援を行い、ともに困難を乗り越え知恵を出し合いながら復興に向けて歩まねばなりません。そして、今回の地震への対応や教訓を次代に生かしていくことが肝要であると思います。

### 地域生活課題解決の 途を開く連携・協働

地域生活課題に向き合うときに大切なことは、点だけではなく面（地域）で生活全体をとらえるということだと思います。利用者本位を考えれば考えるほど、狭い福祉を超えた連携・協働が必要になります。専門分化した縦割りではなく、まくいかな問題がひつくるため、連携・協働してしっかりと光を当てる。いろいろな支援をみんなで話し合っていく、創発する場があることが重要です。地域の暮らしを支える役割として大きく期待されるのは、社会福祉協議会や社会福祉法人ではないでしょうか。そして、行政には、その活動を後押しする役割があります。そのためには、互いに何ができるのか、理解をしあうことが大切です。

社会資源は有限です。その上で、新たな方法を探すのか、制度や社会資源を組み合わせて新たな取り組みをどうつくっていくのか、地域のいろいろな人が手を取り合っけて一体となって、活躍してほしいと思います。

### 社会福祉協議会・社会福祉法人に期待されるもの

社会福祉法人の健全経営とは、何を言うのでしょうか。地域生活課題を解

### 社会課題が生まれる 背景を考える

社会福祉制度・政策は、これまで高齢、障害、児童というような対象者の属性や個別の課題ごとに制度が設けられてきました。社会福祉制度が専門分化していく中で、即応性や生産性は上がりますが、制度の狭間ができます。特に生活困窮者支援においては、それぞれの制度だけでは対応できない状況があります。個人々に応じた個別的・包括的・継続的支援が必要になります。現場は、連携・協働を求めています。社会福祉協議会が培ってきた現場力を活かして、ソーシャルワーク機能を発揮することが求められています。

決する力を発揮するために、健全経営があると思います。利己ができてこそ利他の支援ができます。社会福祉法人が健全な経営で生み出す剰余をもとに、地域社会に新たな公益を生み出すことが求められているのではないのでしょうか。それこそが、全体と部分の最適解の融合となります。自分たちの分野、業務だけを見るのではなく、地域社会全体から見自分たちの役割をどう考えるかという方向に変えていく必要があります。そのためには組織内外のコミュニケーションが重要です。新たな課題にどう向き合うかについて、法人として、役員が一体となってベクトルを合わせる対話が大切です。

また、重要なことは制度を充実しながら、その狭間となる課題に対して目を向けることです。常に誰のための福祉事業かを自問自答していくことが求められます。併せて組織化が大切です。多様な団体が手を取り合い課題に取り組むべきであり、その中核として地域社会に信頼され、必要とされる社会福祉協議会、社会福祉法人の使命、役割を示すときであると思います。

本日のセミナーでお話したことが、京都府における社会福祉協議会と社会福祉法人・福祉施設が、地域において連携強化を図られるためのキックオフとなれば幸いであり、期待をしております。

〈文責 京都府社協〉

# “いざいざもまんなか社会”の実現を目指して

## 「ハイハイから就職まで まるごと」子育てワンダーランド」を開催

はじめに

1月27日、綾部市(会場:あやテラス)にて、福祉の分野を超え、より多くの方と「こどもの居場所」について考え、つながる場となることを目指し、本会

と京都府中丹広域振興局との共催で開催しました。子育て世帯、活動団体、民生児童委員、企業、行政、市町村社協などから約100人が集いました。

### こどもの城づくりフォーラム

「ひとり」が大切にされる地域であるために、ともにある居場所と私たちのつながりから生まれる希望と可能性」と題し、空閑浩人同志社大学教授に基調講演をいただきました。

「こどもまんなか社会」の実現に向けた取り組みがすすめられるなかで、改めて、こども一人ひとりと、その世帯や、地域で暮らす住民、活動団体の一人ひとりが大切にされ、つながり合える地域づくりについて、小説やドラマ、漫画、邦楽など、身近な題材を用い、親しみやすい言葉で届けられました。



り方だと思えます。

私たちとこどもたちとの関係は、教育する・支援する・育てる側と教育される・支援される・育てられる側の一方的なものではありません。大人が強い、こどもが弱いというわけではなく、誰にでも強さと弱さがあり、それらを語り、受け止めてもらえる場所があることが大切なのです。そして、一人ひとりの強さと弱さをどう分け合えるか、そのためにはどうつながるか、つながれるかというのを大切に、地域づくりもしていきたいですね。

人が生きるためには、その尊厳が守られるとともに、どんなに小さくても「希望」が必要です。様々な社会問題が顕在化するなかで、こどもたちや地域の課題に向き合い、活動をする人々がいる事こそ、今を生きるこどもたちの人々の、地域の、社会の「希望」だと思います。皆さんが日々元気に、笑顔で活動される、過ごされるその姿こそが、こどもたちにとって安全で安心できる場所づくりであり、地域づくりだと思います。地域で暮らすこどもたちや人々にとって、「ここで暮らして良かった」「ここで暮らして行きたい」と思えるような機会や出会いが、たとえささやかであっても、これからのたくさんあることを期待しています。



### 中丹子育て未来づくり100人会議

「子育てにやさしい地域づくり」をテーマに掲げ、福知山公立大学准教授杉岡秀紀氏をコーディネーターとして、こどもの居場所「心音」代表神内千恵子氏、(株)山城屋茶舗 取締役豊島永子氏からの実践報告や、参加者全員でのワークショップを行いました。

ワークショップではこども×働き方、こども×居場所、こども×地域とテーマごとに割り振り、こどもと子育て世帯をまるごと支えるための課題やアイデアを出し合いました。子育て世帯を交えながら、様々な参加者が交流する機会となりました。

### 基調講演

## 私

が日々通う同志社を創立した新島襄は「諸君ヨ、人一人ハ大切ナリ」という言葉を残しています。これは教員に向けた言葉で、学生一人ひとりを大切にしましょうという意味が込められています。社会福祉の活動や支援の実践は、そこにいる一人を大切にすることを営みであり、そこで暮らす一人が大切にされる関係づくりや場づくり、地域づくりのための営みです。そして、地域づくりとはそこで暮らす誰も、一人ぼっちにしない、させないつながりづくりだと言えます。

日本は2022年、2023年と中高生の自殺者数が500人を超えているという、非常事態になっています。こどもたちは「助けて」を受け止めてくれる大人や支援者との出会いを求めているはず。教育や福祉には信頼関係の構築が大事とは言え、そもそも私たちはこどもたちに会いたい、たくさん話したい、一緒に居たいと思ってもらえる存在であるか、考えてみる必要が

あります。これらをなしに信頼関係の構築は難しく、教育も福祉も成り立ちません。大切なことは、その子にとって、その場所や関係が安心で、安全で、信頼できることです。「自分はここにいていい」と思える関係や場所があることの大切さを忘れてはいけません。こどもだけでなく、今日は地域共生社会すなわち、共に生きる社会の実現が掲げられています。私は漫画「ONE PIECE(ワンピース)」も研究の題材にしていますが、主人公のルフィが全てを語っています。共に生きる社会とは、堂々と「助けて」と言える相手や場所、助けてもらえる関係、お互いに助け合える関係がある、そんなつながりが共有された社会のあり方なのだと思います。様々な制度を、必要な人が権利として利用できる社会、ルフィのように自分ができないことを認め、誰かや何かに助けてもらおうことへの申し訳なさや後ろめたさ、ためらいや気後れを感じなくてもよい社会の在

## 思いと活動をつなぐ きょうとフードセンターの取り組み

本会では平成30年3月から、全てのこどもが生まれ育つ環境に左右されることなく、その将来に夢や希望を持つて成長していける社会の実現に向けて、こども食堂やこどもの居場所を応援する「きょうとこどもの城づくり事業」に取り組んでいます。

### きょうとフードセンター

きょうとフードセンターでは、食品提供に関する相談や受付、食品提供者とこども食堂等運営団体とのマッチングなどの業務を行っています。様々な企業や団体・個人から食材提供を受け、京都府内で活動することも食堂や居場所づくり団体、児童養護施設等に配布しています。今年度は、延べ約80箇所の企業、個人等から食材を提供いただき、延べ820団体へ配布しました。(令和5年12月末時点)



こども食堂に届いた食材

この度新たに(株)ライフコーポレーションと協定を締結しました。(本



企業から提供された食材

### 人材育成事業

12月19日に滋賀県立小児保健医療センター看護師でアレルギー対応こども食堂スマイルシード代表の笹畑美佐子氏を講師に迎え、「食物アレルギーの基礎知識を学ぼう!」をテーマに研修会を実施しました。本年改正のあった食品表示法を踏まえ、こども食堂を運営するにあたっての食物アレルギーの基本を学びました。

# 将来の地域社会の担い手である子どもたちにも、福祉の世界の魅力を知ってもらおう

## はじめに

京都府福祉人材・研修センター（以下、「センター」という。）では、介護・福祉の仕事が子どもたちの将来の職業選択の一つとなるよう、子どもたちや教員、保護者に対して福祉の理解を深めてもらう取り組みを行っています。

す。また、福祉の仕事を目指す方、福祉の現場を支える方を支援する取り組みとして、就職支援や研修等を行っています。また、介護人材の確保・定着支援として、中途入職者や外国人等の多様な方々への支援や過疎地域への支援等、幅広い支援を行っています。

## 福祉のファンを増やす取り組み

センターが行っている支援は、府内の福祉の仕事に関する最新の動向をつかみながら、あらゆる福祉関係者の方々とつながり、オール京都で取り組みを実施しているという強みがあります。この強みは、小・中学生を対象とした「次世代の担い手育成事業」や高校生を対象とした「高等学校出前講座」、「高校生インターンシップ事業」にも活かされています。

## 福祉の仕事をしている若手職員からのメッセージ

たくさんの人と関わることができる仕事なので、自分自身が成長できます。

自分が必要とされていることを感じ、自分に自信が持てるようになります。

福祉の仕事は、様々なことにチャレンジできる、やりがいのある仕事です。

正解がない仕事なので、常に新しい発見があり、おもしろいです。

色々な考え方、価値観に出会える仕事なので、視野が広がります。

小・中学生を対象とした「次世代の担い手育成事業」では、福祉施設職員による出前講座や施設訪問、高齢者、障害者の疑似体験等、実体験を交えた学習を行っています。地域社会では様々な人が生活していること、そして、その方々の生活を支えている福祉の仕事の中心や魅力について知ってもらいたいと考えています。

講師は福祉職場で活躍している職員が担当しています。講師から自身の体験談を交えた話を聞くことは、子どもたちにとって、福祉の世界の魅力や楽しさを知る機会となるだけでなく、福祉を自分事として捉え、「地域社会の中で自分たちに何ができるか」ということを考えるきっかけとなっています。福祉の世界を知ることだけでなく、子どもたちが、将来、福祉の現場を支える立場や福祉課題を解決する立場として、京都の福祉を盛り上げてくれる存在になってくれることを期待しています。

## 福祉について知り、考えてもらうための取り組み

### ◆ 小学校・中学校

小・中学校の「総合的な学習の時間」等を活用して、福祉の現場を知り、仕事の魅力に触れることで、福祉についての理解を深めるだけでなく、施設訪問や学習発表会等のプログラムを通じて子どもたちの力を伸ばすことができます。

対象学年：小学校4年生～中学校3年生

#### プログラムを通じて得られる気づき・期待できる効果

- 自分の周りの高齢者、障害者について知ることで、「自分にできることはないか」等、自分の行動を見直すきっかけになります。
- 施設の方と触れ合いながら仕事を体験することで働くことの喜びや大切さを学べます。
- 利用者の方、職員の方との交流を通じて、コミュニケーション能力を伸ばせます。
- 学んだことを取りまとめ、学習発表会で発表することで、プレゼンテーション能力を伸ばせます。

### ◆ 高等学校



#### 高等学校出前講座

福祉施設職員等が直接学校に出向き、学校の希望に応じた福祉関連のテーマで、わかりやすい授業を行います。生徒の進路指導やキャリア教育だけでなく、家庭選択の参考にしていただく目的で実施しています。

#### 高校生インターンシップ事業

介護・福祉施設における職業体験（インターンシップ）を通して、福祉の仕事に興味を持ってもらい、福祉系の大学等への進学、介護・福祉分野への就職等の進路選択の参考にしていただく目的で実施しています。



#### 施設職員の声

・地域にある学校と繋がりができてよかったです。学校の授業に協力することは職員にとってよい経験となり、キャリアアップにつながるので、今後も協力したいです。

#### 学校の先生の声

・子どもたちにとって、実際に見て、触れる経験に勝るものはありません。施設見学が、子どもたちにとって「これからの社会を生きる自分たちに何ができるのか」を考えるきっかけになりました。

#### 子どもの声

・介護の仕事は、たくさんの利用者さんの体調管理に気を配らないといけない大変な仕事だけれど、やりがいのある魅力的な仕事だと思いました。  
・車いす体験がとても楽しかったです。車いすで坂道を下るのは怖かったけれど、声掛けの仕方を工夫することで安心感につながることに気づくことができました。  
・介護士さんの仕事は、大変だけれど楽しい仕事だと分かりました。



#### 学校の先生の声

現場の職員さんからお話を聞いたことで、生徒の福祉に対する理解が深まったと感じています。介護・福祉分野への進学、就職を希望している生徒もあり、今後はボランティア活動への参加も勧めたいです。

## 福祉を支える人への支援

### ◆ 就職支援

センターでは、福祉の仕事を知ってもらうためのガイダンスや研修・セミナー、法人との出会いの場である就職フェアの実施等、福祉のことをより知っていただくための取り組みを行っています。また、福祉の仕事や資格取得を目指す方向けの貸付も行っており、福祉の仕事を目指す方を応援するための様々な事業を実施しています。



### ◆ 研修

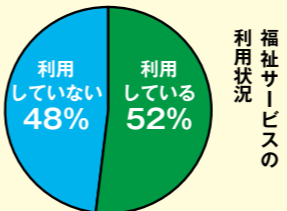
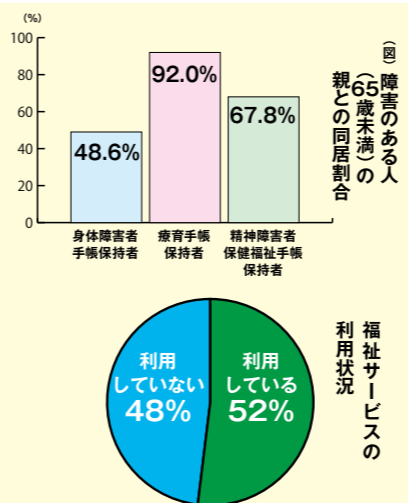
現場で活かせる介護技術の習得や向上を目指す研修、キャリアに応じた知識・スキルを習得するキャリアアップ研修等、どの研修においても事業所へのアンケートに基づいたテーマを設定するなど、現場の課題に寄り添うことを大切に年間約50本の研修を実施しています。



# 障害のある人とその家族が自分らしく暮らせる地域を目指して

障害のある人が自ら望む暮らしができるよう、入所施設等からの地域生活移行支援、地域での生活や就労への支援、意思決定の支援、複合的なニーズに対応する包括的な支援等の制度や仕組みが整ってきています。

その一方、国の調査によると、障害のある人（65歳未満）が親と同居している割合は図の通りです。また、福祉サービスの利用について「利用していない」との回答は48%であり、日々の暮らしの多くを家族が支えていることがうかがえます。



今回のインタビューでは、本人の前向きな気持ちや家族との関係、福祉

サービスの利用などにより、すべては上手くいなくても、本人、家族ともに自分らしい暮らしを実現されています。

今は安定した生活を送れているが、家族にいつか訪れる「もしもの時」をどう乗り越えるか不安に思う声は共通していたように思います。インタビューをおして、どこで誰と暮らすかということをはじめ、日中の居場所・活動場所、就労への寄り添いサポート、当事者本人や家族の交流の機会、困ったときに助けてくれる地域の人の必要性、さらに、趣味や好きなことをした

り、家族の誕生日を祝ったりする日常の大切さを再認識しました。障害者基本法は「全て障害者は、可能な限り、どこで誰と生活するかについての選択の機会が確保され、地域社会において他の人々と共生することを妨げられないこと」と定めています。障害のある人と家族が、それぞれに望むつながり方、生き方ができる社会にしていくことが大切です。

## 慣れ親しんだ地域で生活し続けるための家族の思い

本人..松谷幸さん(42歳)  
同居家族..母 インタビュー..実妹  
同協会イサク事業所(宇治市)

普 段の生活では、CDが好きでしたが、一人で買いに行っていたが、無人レジのパネル操作が難しく買いに行けなくなったこと、甥っ子や姪っ子のお誕生日にはサーティワンアイスを松谷さんがプレゼントし、皆で食べるのが恒例となっていること、家族が近くに来てくれてうれしいことなど話をされました。

松谷さんの妹さんからは「小さいころは姉妹喧嘩もしましたし、思春期には姉のことを隠したい思いもあったかもしれませんが、家族として嫌な思いをした記憶はありません。夏休みに当事者とその家族が参加するサマースクールでは、家族同士のつながりや友達もでき貴重な体験でした」とお話しくださいました。現在は、お母さんが留守の時や入院された時にサポートをしておられるそうで、その背景には「妹にも自分の家族を優先してほしい」というお母さんの思いがあることをうかがいました。



同協会につながる決め手となったさをり織

今後の生活について、ご家族はグループホームの利用を想定する一方、おうちが好きな松谷さんのため地域でヘルパーを利用しながら住み続けたいという思いをお持ちです。住んでおられる地域も高齢化が進んでいるため、親亡き後一人で地域生活を送っていくことへの不安もあり、これからのことを家族で話し合っておく必要を感じておられます。

「もし、何か幸さんに困ったことが起きた際に助けてもらえるかなと思うので」と顔写真掲載を快くOKしてくださったことが印象に残りました。

## 制度活用により維持した地域での生活

本人..廣瀬ゆみ子さん(72歳)  
家族..廣瀬多鶴子さん(義姉)  
社会福祉法人 亀岡福祉会 デイセンターほれほれ(亀岡市)

廣 瀬さんは若い頃に一般での就労を経験されましたが、宿舎や働く環境に馴染めず1年ほどで退職し、その後、廣瀬さんのお父さん達が地域で立ち上げられた現作業所に通うこととなりました。

現在は、グループホームで暮らし、平日は生活介護事業所(障害福祉サービス)を利用されています。たまに実家に帰って家族と過ごす時間が本当に好きな廣瀬さんの思いに、ご家族も楽しみにされています。

生活で困っていることについて、65歳を過ぎて障害福祉サービスから介護保険制度利用に切り替わり、費用の自己負担が増えたので、大好きな名探偵コナンの映画や京都府立植物園に行くのも控え気味になってしまっているようです。

これまでの思いを家族にお聞きすると、「地域性や時代もあると思います。が、当たり前と思って家族介護をしてきました。制度を利用しながら介護を



ゆみさんの描いたバラの絵と一緒に

続けてこられたのは、タイミングも味方したように思います。仕事と介護が重なりしんどかった頃もありましたが、三世同居でにぎやかに過ごし、家族仲が良かったのでやってこられました。私自身も高齢になっていきますし、本人をひとり残しては逝けないので心配です」とお話しくださいました。

## 自立に向け本人の思いを尊重した親としての関わり

本人..Tさん(23歳)  
同居家族..母(手紙取材)  
就労継続支援B型事業所 三休(京田辺市)

二 休の職員とつながりのあったTさんのお母さんが、当時引きこもりがちだったTさんに話を持ちかけたことをきっかけに就労を開始されました。体調を崩し1年ほど通えなかった期間もありましたが、現在は体調の様子を見ながら、週2日の就労を再開されています。

今の生活の不安として、自身の障害や体調のことに理解のある職場でないことと長く勤めることは難しいと気づいたことや、乗り物全般が苦手な距離のある通勤が難しいことが就職先の探しにくさにつながっていることとお話しくださいました。また、コッコツと頑張る仕事に向いていることを就労継続支援B型事業所での経験を通じて感じたことから、今後は一般就労を目指したいという目標も教えていただきました。

家族が自身の意思を尊重してくれており、プレッシャーや急かされるようなこともなく自由に過ごせていること



Tさんが三休で作っているハーブティー

に感謝されていました。本来であれば苦手であるインタビューも、自身の成長のためにと前向きに引き受けてくださったのが印象的でした。Tさんのお母さんからは、専門学校入学後、通院以外は家から出られない状況が続いたときに、親としてどうしてあげれば良いか見通しが持てず不安だったこと、その中でもTさんを信じて「大丈夫」と見守ってこられたことが三休への通所再開に繋がったこと、「親はいつか老いていくので子どもの自立を願っている」という思いのメッセージをいただきました。

# 令和6年能登半島地震への支援について

令和6年能登半島地震において、お亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様ならびにご家族の皆様にご心よりお見舞い申し上げます。また、高齢者や障害のある方、子どもをはじめとする配慮が必要な方に対して懸命に支援を続けておられる社会福祉関係者の皆様方に心から敬意を表するとともに、一日も早い復興をお祈りします。京都府社協は現地への派遣だけでなく、京都へ避難された方への情報提供や募金など、関係機関と連携して京都からできる支援についても取り組みます。(令和6年3月20日現在)



派遣内容	期間	人数
京都 DWAT 事務局	1月21日～22日 2月2日～4日	2名
社協活動支援業務	1月25日～30日 2月13日～19日 2月17日～23日	3名
生活福祉資金 災害特別貸付業務	1月25日～30日	1名
災害コーディネー ション業務 (JVOAD)	2月11日～14日 2月19日～26日	2名
先遣調査・ ボランティア活動	2月17日	10名
		計18名

**京都府社協（京都府災害ボランティアセンター）の派遣・取り組み**

- ・全社協やJVOADの依頼を受け、社協の近畿ブロックから七尾市にて災害ボランティアセンター活動及び地元社協活動支援や石川県域のボランティアコーディネーション業務を行う。

**京都 DWAT の派遣**

- ・中央センターの依頼があり、避難所における要配慮者のニーズ把握・地域の機関への調整や橋渡し、七尾市における DWAT チーム（各府県混成チーム）の地域リーダーとしてコーディネート業務を行う。
- ・1月6日より京都 DWAT チーム員を派遣、志賀町、七尾市で活動。3月末まで累計41クルール41名を派遣。
- ・1月17日～22日まで奥能登地域の先遣隊に1名派遣。

**市町村社協の派遣（社協活動・災害ボランティアセンター支援）**

- ・京都府市町村社協連合会は京都市社協と協働し5月9日まで26クルール派遣予定。（17クルールまで累計23名派遣）



- ・被災され京都に避難されている方への貸付2件
- ・令和6年能登半島地震災害ボランティア活動サポート募金を募集

**七尾市への派遣者の声（社協活動・災害ボランティアセンター支援）**

七尾市災害ボランティアセンターの受け入れに伴う現地調査では、希望される活動内容や環境の確認だけでなく、被災された方との傾聴の時間をとることも大事にしました。「ご無事でよかったです」等の声掛けに、堰を切ったように話してくださる方が多く、心のケアが必要と感じました。また、民生委員の方は気になる方を訪問し、本人に代わり、ボランティア依頼の電話をかけてくださる方もおられました。現地社協職員は災害ボランティアセンター運営の後、社協業務を行った上で1日の仕事を終えており、主要な職員は休まず出勤されました。被災され自宅の片付けもままならない職員もおられ、休んでもらえる形をつくる必要があると感じました。

**京都府内福祉施設からの支援**

- ・全社協の依頼により京都府内施設から被災施設への応援派遣。
- ・近畿社会福祉法人経営者協議会では15次避難所におけるケアワーカー応援派遣を行う。京都府社会福祉法人経営者協議会も協力。

# 包括的な支援体制の整備に向けて

## 重層的支援体制整備事業の推進

**市町村間ネットワーク会議**

第1回 令和5年8月22日  
第2回 令和6年2月16日

京都府では長岡京市が令和5年度から重層的支援体制整備事業を実施。現在、福知山市、舞鶴市、亀岡市、京丹後市、精華町、京都市の6市町が移行準備事業に取り組んでいます。本会議では、事業に取り組む各地域の実情に合わせた体制整備の進捗を共有するとともに、取り組みの中でみえてきた課題を共有し、検討しています。

**包括的支援体制構築に向けた研修会**

第1回 令和5年10月23日  
第2回 令和6年2月16日

重層的支援体制整備事業実施自治体に限定せず、京都府内の全ての市町村担当者を対象に、包括的な支援体制の構築に向けた研修会を行いました。第1回研修会では、厚生労働省から



事業説明をいただくとともに、一般社団法人コレカラ・サポートが開発した、人と地域資源をつなげることで社会的孤立を解消する協力型ボードゲーム「コミュニケーションピング」を体験し、他機関や地域住民との連携を考えました。第2回研修会では、愛知県稲沢市、舞鶴市、京丹後市からの実践報告を受け包括的な支援体制を構築する意義を確認しました。

**各地の取り組み**

京都府内では、各地域でこれまでに積み上げてきた相談支援体制や、地域づくりの取り組みを活かしながら、包括的な支援体制の構築がすすめられています。

**長岡京市：事業実施**

「人・考え方・活動」に出会える場所、市民活動の中で活動課題を解決できるアイデアを共有できる場所として、「取りこぼさない支援を考えるプラットフォーム」が実施されています（年4回）。長岡京市内の事業者や活動者が参加し、多様な取り組みや実践者がつながりあり、あらたな活動を生み出すきっかけ場となっています。



**舞鶴市：移行準備中**

市内包括マネージャー1名、舞鶴市社協が委託を受け、包括化推進員3名を配置。行政内を包括化する市内連携と、世帯の困りごとを包括的に受け止めるための他機関連携に力を入れています。包括化推進員が積極的に地域に向き、複雑・複合的な課題を抱える世帯の支援をしながら、今後の事業実施の在り方について検討しています。

**京丹後市：移行準備中**

市内検討委員会と、ワーキンググループを設置し、地域住民にとってよりよい「地域づくり」「相談支援」「参加支援」を検討。少子高齢化、人口減少等、京丹後市の将来を見据え、持続可能な形での事業実施を目指しています。「地域づくり」では、京丹後市社協が委託を受け、身近な相談窓口と地域のつながりづくりの取り組みが進められています。

**京田辺市：移行準備前**

移行準備に入る前段階として、市内でワーキンググループを設置し、連携に向けて取り組んでいます。2月9日には、行政の福祉部門及び京田辺市社協と合同でコミュニティコーピングを活用して、関係機関や地域住民とつながる意義について考えました。



京都府社協は地域共生社会の実現を目指し、市町村の状況に応じた包括的な支援体制の整備が進められるよう取り組んでいます。

## 京都府社会福祉協議会からのお知らせ

● **ご寄贈ありがとうございました。**  
● **ご芳志の趣旨に沿い活用させていただきます。**

### 寄贈

「関西遊技機商業協同組合」様より、車いす（7台）のご寄贈のお申出をいただき、ご芳志の趣旨に沿い、京都市社会福祉協議会、福知山市社会福祉協議会、宮津市社会福祉協議会、亀岡市社会福祉協議会、向日市社会福祉協議会、京丹後市社会福祉協議会、与謝野町社会福祉協議会へお届けすることとなりました。



## 食品等の提供・譲渡に関する協定式を開催 ～株式会社ライフコーポレーションと～

株式会社ライフコーポレーションと本会は、「食品等の提供・譲渡に関する合意書」を令和6年1月4日に締結し、2月22日に協定式を行いました。

本会に御提供いただく食品等を、子ども食堂等団体支援をはじめとする福祉事業に活用し、地域住民の生活支援を効果的に進めることを目指し、連携・協働していきます。

協定式後には京都市内3店舗から食品・生活用品を御提供いただき、こどもの居場所づくり団体等にお渡しすることができました。

### 食品等の提供・譲渡に関する協定式



## FUKUSHI就職フェア KYOTO

予約不要・入場無料

随時入退場可・服装自由

介護・福祉の仕事 合同就職説明会を実施します。

**京都府内全域対象**（約100法人が出展[予定]）

5ブース訪問で QUO カード  
500円分プレゼント!  
(先着100名様)

**日程** 6月30日(日)

**対象** 学生(2024年度卒業予定者等)  
一般求職者(未経験者も大歓迎)

**時間** 12:30～13:00 業界研究セミナー  
13:00～16:00 合同就職相談会

**問合せ先**  
福祉人材課(京都府福祉人材・研修センター)  
TEL:075-252-6297  
<https://fukujob.kyoshakyo.or.jp>

**会場** みやこめっせ(京都市勧業館)3階  
(市営地下鉄「東山」徒歩約8分/市バス5、100系統  
「岡崎公園・美術館・平安神宮前」下車)



●本会へのご意見等は、下記URLの「お問合せフォーム」を通じてお寄せください。

<https://www.kyoshakyo.or.jp>



本紙は、共同募金の配分金によってつくられています。  
©中央共同募金会

## 福祉事業を始めるなら

# 賠償責任保険は必須です!

福祉事業者総合補償制度  
「まごころワイド」をおすすめします。

充実の賠償責任補償制度、  
安価な傷害見舞金補償制度など  
必要なプランを組み合わせでご加入いただけます。

福祉専門チームによる安心の事故対応、京都市社会福祉協議会、  
京都府社会福祉協議会が提供する福祉の現場に合った内容です。

詳しい補償内容はこちらまで

福祉の保険「まごころワイド」取扱代理店

京都の総合  
保険代理店 **SRM** 株式会社 **エスアールエム**

専用TEL **075-255-0883**

福祉の保険  
ホームページ <https://srm.moushikomi.jp/>

引受保険会社:三井住友海上火災保険株式会社

この広告は保険の特徴を説明したものです。  
詳しくは商品パンフレットをご覧ください。 版1-10-1111

ボランティア活動には「ボランティア保険」  
イベントを開催される際には「福祉行事保険」も併せてご利用ください。